

運動部活動が中学生の成長に与える影響

梶澤 拓郎(永野ゼミナール)

HS21-1029A

目次

はじめに

第1章 部活動の歴史と子どもたちが受けた影響

1-1 明治期の部活動

1-2 大正から戦前までの部活動

1-3 戦後の部活動

1-4 平成から現代までの部活動

1-5 子どもたちが受けた影響

第2章 子どもの発達段階と部活動の意義

2-1 青年前期の発達段階

2-2 部活動の役割

2-3 部活動の意義

第3章 運動部活動の現状と課題

3-1 生徒の負担

3-2 教員の過重労働

第4章 運動部活動「A 中学校陸上競技部」の事例

4-1 「A 中学校陸上競技部」について

4-2 調査結果と分析

4-3 今後の部活動に必要なこと

おわりに

参考・引用文献

参考・引用資料

はじめに

私は、母校である「A 中学校陸上競技部」で学生コーチの活動を行っている。その中で、子どもたちにはスポーツの技術だけでなく、返事や挨拶等の他者に対する礼儀を大切にするように指導している。しかし、ある時から、子どもたちがよりよく成長す

るためには何が必要なのかを考え始めた。他者への礼儀を大切にすることは、本当に子どもたちの成長に繋がっているのだろうか。

そこで、本論では、運動部活動に所属して活動することが、中学生のどもたちの成長に、どのような影響を与えているのかを分析する。また、彼らがより良く成長するためには、運動部活動が今後どのようなあるべきなのかを考察する。

1 部活動の歴史と子どもたちが受けた影響

部活動は、明治20年代に作られた「校友会」を起源としている。そこでは、競技性よりも親睦を重視しており、子どもたちが楽しみながら社会性や人間性を育む場であったと考えられている。しかし、時が経つと、競争や「勝利至上主義」が強調されるようになった。大正期には、それに反発する形で学生運動が起こり、校友会活動が交友重視へと回帰する傾向も見られた。昭和期初頭では、非科学的練習や封建的運営などの課題が顕在化した。戦時中には「校友会」が「学校報国団」として再編され、勤労働員を目的とした活動が中心となった。

戦後は、自由研究やクラブ活動として再編され、子どもたちの社会性や、人間性を育む場として奨励されたが、指導や環境に課題も残った。1970年代には「必修クラブ」が導入されるが、現実的な運用上の困難から部活動との混同が進んだ。その後、平成期には必修クラブが廃止される一方、入試や保護者の要望により、部活動は存続。現在では、外部委託や地域移行が進むなどの変化が見られる。

部活動は、子どもたちの社会性の育成や、心身の成長に大きな影響を与えている。その一方で、過度な競争や指導環境の課題を抱えているといえる。

2 子どもの発達段階と部活動の意義

中学生期は、アイデンティティ形成に重要な時期である。この時期に必要な要素は、①自己の在り方を考える力、②社会の一員として自立する力、③ルールの意義を理解し徳心を育む力である。部活動は、文部科学省の学習指導要領で「責任感・連帯感の涵養や資質・能力育成を目的」と示されている（文部科学省、2017）。スポーツ庁のガイドラインでも自己肯定感や良好な人間関係構築の意義が強調されている（スポーツ庁、2018）。

また、調査によれば、部活動は社会的スキルや友人関係を広げる場でもある（ベネッセ教育総合研究所、2018）。運動部活動では、他者との交流を通じて自己理解を深め、礼儀やルールの意義を学ぶことでコミュニケーション能力や協調性を養う。こうした成長は、未来を担う子どもたちが、社会に貢献する基盤を築いているといえる。部活動は、その支援として非常に重要である。

3 運動部活動の現状と課題

運動部活動は、生徒と教員の双方に大きな負担を強いている現状がある。子どもたちは体罰や暴言などのハラスメント、長時間練習による疲労や怪我のリスクに直面している。また、過度な勝利至上主義の考えにより、子どもたちは肉体的にも、精神的にも大きな負担がかけられている。

教員は、部活動指導の時間があることにより、過労死ラインを超える勤務時間が常態化している。部活動問題の解決には、外部指導員の増員や活動の外部委託が求められる一方、教員自らの意識改革も必要とされている。生徒と教員の負担軽減を目指し、

適切な指導環境と労働環境の整備が急務である。

4 運動部活動「A 中学校陸上競技部」の事例

「A 中学校陸上競技部」顧問への聞き取り調査を通じて、子どもたちの変化や成長の様子、現在の部活動の問題点を明らかにした。また、今後の部活動のあり方について考察した。

子どもたちは、集団の中で活動し、多様な経験することで人間性が磨かれていく。また、子どもたちは適切な目標設定をすることで、心身共に成長していく。指導者はそれを後押しできるように接する必要があるため、競技の専門性と子どもたちをよく理解している指導者が必要である。さらに、気軽に活動したい子どもたちや、部活動指導に積極的ではない教員のために、多様な選択肢を設けることで、双方にとって望ましい部活動にする必要がある。

おわりに

本論の考察から、運動部活動は多くの人と関わる場であり、そこで子どもたちに多様な経験を提供しているといえる。それが、子どもたちに大きな影響を与えており、よりよい成長を促している。しかし、「ブラック部活」が存在していることも注意しなくてはならない。「生徒にとってのブラック部活」と、「教員にとってのブラック部活」は、現在の部活動において、深刻な問題のひとつである。今後の部活動は、生徒と教員の双方に望ましい形で行われることを望む。

主要参考文献

内田良（2021）『部活動の社会学—学校の文化・教員の働き方』岩波書店
中澤篤史（2014）『運動部活動の戦後と現在—なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』青弓社